もっと知ろう。いろんな宗教のこと～未来につながる多文化共生～

皆さんは海外へ旅行されたときに、歴史的建造物として教会やお寺、またモスクなどの宗教施設を訪れたことがあるでしょうか。

近年では留学生や技能実習生などの外国人居住者の増加により、愛知県内でも外国人居住者が経営するレストランや外国人向けの食材を扱うお店のみならず、壮麗なモスクの建物や、日曜日に教会に向かう方々を見かけることもあるのではないでしょうか。

そのような宗教施設が注目されたのは、1995 年の神戸の震災後、さまざまな宗教施設が救助という共通の目的のため、協力し合い大きな力となった時です。近年では、愛知県でも難民や非正規労働者のため、宗教の垣根を越えた生活支援を行う宗教組織も存在しています。また、宗教により形成されたコミュニティでは、宗教活動だけでなく、外国人居住者と日本社会をつなぐため、日本人が中心となった社会的な活動も行われています。

今後も様々な国から長期にわたり日本に居住される方が増えるにつれて、宗教施設に通う外国人が多くなると考えられます。今号では、仏教、キリスト教、イスラム教の施設についてその成り立ちや、より良い多文化共生社会のためにどのような活動をされているのかについてご紹介します。

ミッタディカパゴダ

▲馬島さんとミャンマーの人々

▲灯明祭りの様子

在留外国人の増加に伴い、ミャンマー人の数も年々増えています。2015 年 6 月末時点での日本の在留ミャンマー人の総数は 12,590 人ですが、2022 年 6 月末には 47,965 人に増加しています。愛知県でも、2020 年 12 月の時点で 2,005 人のミャンマー人が暮らしており、日本で 3 番目に多い県となっています。（法務省在留外国人統計による）

ミャンマーでは、人口の約 89%が仏教徒とされ、仏教の国、パゴダ（仏塔）の国といわれています。仏教徒は、子どもの時から人生儀礼や仏教の儀礼の際にはお寺やパゴダにお参りします。また、男子は 10 歳前後に通過儀礼として得度し、見習い僧として 1 週間から 1 か月ほどお寺で暮らす習慣があり、お寺やパゴダは暮らしの中心となっています。

そんなパゴダが 2015 年、名古屋市中川区の住宅地に建立されました。ミッタディカパゴダと名づけられたこのパゴダは、難民や留学生、技能実習生等として日本に長く滞在することとなったミャンマー人たちと、彼らを支援してきた日本人の協力の下、建設されるに至りました。このパゴダ建設において中心的役割を果たしたのは、日蓮宗妙本寺住職の馬島浄圭さんです。馬島さんがビルマ問題に目覚めたのは、1990 年にタイで開かれた仏教者国際連帯会議に初めて参加し、ビルマ難民の訴えを目の当たりにしたことによります。翌 1991 年にも会議に参加し、シャン州の避難民のキャンプを視察しました。それ以来、30 年以上にわたってミャンマー人の支援に関わってこられ、日本に住むミャンマー人から慕われています。

2012 年から始まったミッタディカパゴダのプロジェクトは、馬島さんが、たまたまミャンマーから取り寄せた仏像をパゴダに納めたいとのミャンマー人からの要望によるものでした。馬島さんには、さまざまな立場の在日ミャンマー人たちがパゴダを建立するという一つの目的のもと、心を一つに協力しあうことができれば、という思いがあったそうです。

現在このパゴダでは、定期的にイベントが開催されており、特にミャンマー人にとって大切なお釈迦様の誕生日である「カソン満月の日」や「ダディンジュの満月の日」に灯明祭りが行われ、多くのミャンマー人が参加しています。新しく来日したミャンマー人もフェイスブックなどからこのパゴダの存在を知り、年々参加者が増えています。

パゴダの建立と併せて同じ敷地にゲストハウスが建てられており、週末にミーティングをしたり、宿泊したりすることができます。この施設を利用して、子どもたちに向けての母語教室、乳がん検診や献血を行うなど、ミャンマー人の社会生活を支援するための取組もなされています。

▲母語教室の様子

このようにパゴダは、愛知県内のミャンマー人が仏教徒としてのアイデンティティを保ち、心の安らぎを得るだけでなく、在日ミャンマー人が安心して社会で暮らしていくことができるようミャンマー人と日本人が協働でコミュニティを作り上げていく場となっています。

参考文献：神戸新聞総合出版センター「百花繚乱　ひょうごの多文化共生 150 年のあゆみ」
明石書店「アンダーコロナの移民たち」
明石書店「ミャンマーを知るための 60 章」
特定非営利活動法人　名古屋難民支援室「名古屋のミャンマー式パゴダにみる、多文化共生のあり方」

写真提供：本岡 弘氏

カトリック名古屋教区　司教　松浦悟郎

寄稿文

カトリック教会では毎週日曜日にミサという礼拝が行われています。どの教会にも外国籍の信徒はいますが、特に、1980年代半ばにはフィリピンから、90年代に入り日系というカテゴリーで南米から、最近ではベトナムから多くの人が来日してきました。そのために、愛知県下の多くの教会は彼らの母国語ミサを定期的に行うように配慮していますが、何よりも彼ら母国での宗教的な祝い（祭り）が彼らにとって大きな喜びになっています。ペルーの「奇跡の主」という祝いも複数の教会で開かれていますが、ブラジルの「アパレシーダのマリア」は、教会の広場に2000人規模で集まります。彼らはまるで母国にいるように喜んでいます。

人を受け入れるということは、その人の人生（家族、生活の問題、生きがいなど）を受け入れるということです。特に信仰を持っている彼らにとって、教会はもう一つの故郷のように受けとめているので、教会が本当に彼らを暖かく受け入れ、問題があれば一緒に考えて共に歩もうとしているかが常に問われています。3年前、名古屋市内に男女別のシェルターを2か所作ることができましたが、そこを世話する日本人たちも関わることで入所者と親しくなり、日本社会の問題（すなわち自分たちの問題でもある）にも気づくようになってきています。外国人住民の存在は教会をオープンにし、また豊かにしてくれています。私は、社会もそうあってほしいと願いながら彼らと接しています。

▲聖堂内部

▲セニョールデミラグロス・司教祝福

写真提供：カトリック名古屋教区

名古屋モスク　渉外担当理事　サラ　クレシ好美

寄稿文

ムスリム[i]の数は、世界人口の4人に1人と言われるほど急増していますが、日本国内ではまだ23万人ほどしかいないマイノリティな存在です。それでも愛知県には、東京に次いで2番目に多い2万2000人以上のムスリムが暮らしています[ii]。

そのムスリムが集団礼拝を行うモスク[iii]は、県内に11か所あります。その中で最も早い1998年7月に開所したのが名古屋市中村区にある名古屋モスクです。1980年代に急増した留学生を中心に作られたムスリム・コミュニティの募金活動によって、わずか17坪の狭小地に建設した小さなモスクですが、この地に暮らすムスリムの生活を四半世紀にわたり支えてきました。現在は留学生に限らず県内外で就労する外国人やその家族たちの利用も多く、その国籍はインドネシア・マレーシア・パキスタン・トルコ・ウズベキスタン・エジプト・ガーナほか多様であり、日本人の姿も見かけます。

主な活動は、毎日5回の礼拝・毎週金曜日の集団礼拝・年に2回のイード[iv]礼拝の先導、イード会場の手配、ラマダーン月[v]の朝食・夕食の提供、ハッジ[vi]の手配、勉強会、入信や結婚の手続き、葬儀であり、自主グループによる女性や子どものための各種集会も行われてきました。マイノリティとして日本に暮らすムスリムにとっては、国籍を超えて同胞らとつながるための重要な拠点となっています。このほか名古屋モスクでは、地域・他宗教との交流、自治体との連携などの対外的活動にも注力しており、WEBサイト、教育機関・自治体・企業に向けた講演、モスク見学希望者への対応を通して、誤解や偏見を抱かれることの多いイスラームを正しく知っていただくための発信も続けています。

▲名古屋モスク外観

▲イード礼拝の様子

i　イスラーム信徒。
ii　店田廣文『世界と日本のムスリム人口　2019/2020年』多民族多世代社会研究所、2021年、P.14より。
iii　イスラームの礼拝施設。
iv　イスラームの祝日。
v　太陰暦9番目の月。この期間、日中は断食を行う。
vi　メッカへの巡礼。

写真提供：名古屋モスク